

愛に陥っている。異国の地でのこの恋愛経験は、無力な「等身大の人間」として日常の「生＝性」を生きる自己、それゆえに一人の愛する女性の前で、何ら有効な言葉を紡ぎ出すことができない年若い自己、を竹内に強く意識させた。それより以前、竹内はすでに自身の「卑小」さを意識する中で、「小説を書かなくてもいいから、文学者としての矜持を失わずに生きたいと切に懇う気持ち」を持つに至っていた。恋愛経験はそうした自身の卑小さをより深く自覚させる契機となったに違いない。むろんこうした恋愛経験は他の多くの人にも起きる。問題は、竹内がその経験を、北京という自己の文学の対象となる異国空間において、「等身大」の中国の人々の現実を文学的感性をもってとらえようと決意を固める中で、その身に受けたことにある。それゆえに竹内には、この恋愛経験を自身の知識人としてのあり様と無関係なものとして方法的に切り捨てることが到底できなかったのである。

## [II]

### 「非政治」と「政治」：水俣病の事例から

民衆の抱える「非政治性」は実際には、現象的に民衆が政治運動に立ち上がり「政治の季節」を到来させている際も、一貫して持続していると言わねばならない。言い換えれば、民衆は「非政治性」を払拭し切り捨てて、「政治性」を帯びるようになって政治運動に立ち上がるわけではない。

「非政治世界」の住民である民衆は、かつて鶴見和子が柳田国男に倣って常民と呼んだ人々を典型としている。常民は原理的に日常の生業（日々のたつき）が成立し守られている限りは、みずから「政治」に近付いたり、また「政治」を招き寄せたりすることはない。常民にとって「政治」は通例「向こうからやって来る」ものとしてあるからだ。たとえば作家石牟礼道子はその半生をかけ

て描き続けた熊本県不知火海の水俣漁民は、まさにそうした常民にほかならなかった。では常民にとっての「政治」が「向こうからやって来る」ものとしてあるとはどのようなことなのか？

水俣病が最初に確認されたのは、今からちょうど50年前の1956年のことである。水俣漁民にとって水俣病は彼らの日々の生業を破壊するものとして「向こうからやって来た」ものにほかならなかった。新日本窒素(株)水俣工場のアセトアルデヒド排水中のメチル水銀化合物による不知火海汚染によって、多くの水俣漁民はみずからが激しい苦しみを伴う水銀中毒の水俣病に襲われただけでなく、水俣湾産の魚介類の有機水銀汚染によって生業である漁業のなりわいそのものをも奪われた。

水俣漁民にとって水俣工場自体はむろんみずから望んで誘致したものではない。歴史的に見ると新日本窒素の前身である日本窒素肥料会社(以後、日窒と略)が1908年に水俣工場を設立したことに始まり、1950年に日窒が解散したあとを受け継ぐ形で新日本窒素(以後、新日窒と略)が設立された。その前後から、水俣病が発生するのである。もともと日窒の段階ですでに1932年アセトアルデヒドの生産が開始され、それ以後メチル水銀(有機水銀)の流出が生じていたが、徐々にその生産規模が拡大するにつれて1942年水俣市月の浦でのちに水俣病と判明する患者が発生していた。そののち新日窒が設立されて3年を経過した1953年水俣病第一号と認定された患者の発病が起きたのである。

当初水俣病は風土病あるいは伝染病とされていたが、第一号患者の発生から3年後の1956年熊本大学医学部研究班が伝染病説を否定、病因を新日窒水俣工場からの有機水銀を含む排水と指摘し、初めて水俣病問題が政治問題化することとなった。ここで「政治問題化」と言うのは、まず何よりも不知火海を漁場とする水俣漁民が自身の日々の生活の破壊に抵抗するために社会的政治的に立ち上がったという事実を指している。具体的

には1959年春水俣漁民は新日窒水俣工場に損害賠償を請求、工場側が有機水銀説自体を否定し請求をはねつけたため、一部に乱闘騒ぎが起き、さらに同年11月に不知火海漁民約三千名によるデモ行進が挙行され、工場側の高圧的対応に激化した漁民が水俣工場に乱入した。この事件は「漁民暴動」と呼ばれたが、これを契機に水俣病は全国的な注目を浴びるようになったのである。第一号患者の発生からすでに6年を経過していた。

水俣闘争支援にかかわった谷川健一は次のように述べている。

「ノーマルに生きたかった庶民がいっぱいいるわけです。……しかし、生きようとしてそれが生きられないというところに問題があるわけで、最初からアブノーマルな、奇形なものとして、いわゆる鬼子として出されてくると、ノーマルなものが見つめない。しかしノーマルな庶民の歴史がすでに水俣に何百年、何千年とあったわけです。昔々、万葉の時代からうたわれているわけですから。そういうものの果てに水俣病が出てきた。……ノーマルなものの果てにアブノーマルなものが出て来ている。アブノーマルにならざるを得なかった残念さが出て来ている」<sup>4</sup>。

生きられるがままに生きて、しかもついに生きることのできない地平に追いやられるとき、常民はその「等身大」の日々の「非政治的」な生活の場に身を置いたまま、そこを離れることなく、しかも自分たちをもはや生き得ない境界へと追いやった「政治世界」そのものを撃つために立ち上がる。この点はすでに述べたように知識人エリートの多くが、みずからの日常的な「等身大」の「非政治性」を切り捨てて「政治」にかかわってゆく傾向を持つのと対照的である。

たとえば水俣病闘争が全国的な注目を浴びるようになってのち、全国各地から支援のために水俣に参集した人々について言えば、ほとんど例外なくみずからの日常的暮らしの「等身大」の「非政治性」を切り捨てる形をとって闘争に馳せ参じ

るを得なかったはずだ。それゆえ支援の人々は闘争参加後に、様々な事情で闘争の現場から離れて再びもとの自分の日常の暮らしに戻ることも可能なのである。つまり支援の人々は「非政治」と「政治」の間を空間的にも意識的にも行き来することによって、「政治」にかかわる傾向を強く持っている。

このことは支援者の多くが実は常民としての生き方をすでに希薄化させる傾向を帯びていることを示すものと言える。と言うのも常民とはそう易々と自身の日常的な「非政治」の生産生活の場を空間的にも意識的にも離れることができない存在だからである。農林漁業のような生命を帯びた有機的自然と深く結びついた常民の生業は、一定の循環型自然生態系の環境に支えられている。そのため常民の生業はそうした自然生態系の生命サイクルに制約されることとなり、好き勝手に生業の場を離れることはできない。林業における植林、間伐、枝切り、伐採、農業における田起こし、種まき、苗床作り、田植え、病虫害対策、収穫、などはすべて一年間の季節の周期さらには数十年間にわたる動植物生命循環の周期に制約された作業を不可欠とする<sup>5</sup>。同様に農林漁業を包む自然生態の美しい景観も、何世代もの長きにわたる民衆の自然に対する人為的働きかけの積み重ねの上に作り上げられたものであり、決して一朝一夕にして出来上がるものではない。つまり農林漁業における動植物生命循環の周期は、工業における機械工場生産のように技術革新や経営効率を上げ、資本投下さえすれば短期に生産現場を構築でき、かつ生産周期も人為的に短縮できるのとは、根本的に異なる性格を持っている。

水俣病支援に集まった人々の大多数は多少ともそうした常民的暮らしを喪失した人々にほかならなかった。というより1950年代後半期に開始した石炭から石油へのエネルギー転換と、60年代に入ってから的高度経済成長の進展によって、日本社会自体がそうした常民的暮らしを急速に削り

取るプロセスに突入していたのである<sup>6</sup>。

すべての人間は、イノチを持つ限り上述の動植物生命循環の周期と同様の、人為によって短縮し得ない生命周期を持っている。たとえばすべての人間は十月十日の妊娠期間を経ることなしにこの世に誕生することができない。この妊娠期間は人類誕生以来、今日まで数百万年間、いかなる技術革新によっても短縮することができないで来た。さらに生誕後の人間は、嬰兒から幼児の期間、少なくとも4、5年間にわたって決定的なまでに第三者の養育と保護を必要とし、一般に養育に当たる親はこの時間に耐えることを求められ、物理的に強く拘束される。この時間もまた短縮不能なままに来た。最後に生命体としての人間は日々のイノチの再生産過程で、自己の身体に直接かかわる睡眠、食事、排泄などの生命的営為を不可欠とし、その時間を省略したり大幅に短縮したりすることはできない。

「等身大」の日常の「非政治性」を切り捨てずに生きるというのは、こうした自己のイノチに直接関わる生命循環周期の制約を常に自覚するという事にほかならない。とは言え、現代の人間は自身の生命循環にかかわる営為以外の他の営為については、掃除・洗濯・炊事の電氣化による大幅な時間短縮、通信交通についても携帯電話、新幹線、高速道路網の出現による高速化、情報取得集積についても日進月歩のコピー機、コンピューターの技術革新による高速化、等々による驚異的な時間短縮すなわち省力化を実現してきた。このゆえに現代人はしばしば自己の「等身大」の生命時間の制約を忘れて、すべての時間を短縮化できると錯覚し、時間を抽象した観念世界に意識を「飛翔」させる傾向を強く持つ。

岡山麻子が指摘したように「北京日記」に記された恋愛経験が、竹内好の「方法としての中国」に重い地位を占めるのも、その恋愛経験が竹内の「等身大」の自身の生命における心身の制約を意識させ、またそこに知的エリートあるいはインテ

リゲンチャとしての自己の限界（「卑小さ」）を意識させた点にある。しかも竹内はみずからのその「卑小さ」を厭うのではなく、むしろ愛しんで、あえて「小説を書かなくてもいいから」と言い、事実その生涯を通じて竹内は小説を書かなかった。この断念は北京滞在時期の「等身大」の自己に生涯を通じて自分の意識を係留し続けることを覚悟したからではなかったか、と私は思う。他方で竹内は「文学者としての矜持を失わずに生きたい」と言うとき、そこにはむろん竹内自身が、すでに農林漁業に従事するような常民そのものではあり得ないことが意識されている。つまり竹内の文学とは、一方で「等身大」の自己に意識を係留させ続けながら、他方で「等身大」を越える世界に向かって文学の言葉を吐こうとする、そうした内部に自己を切り裂く矛盾を抱えた営みだった。事実、自己の文学が対象とする中国は所詮は自身の永続的な生活の場ではなかったが、にもかかわらず生きて日々を暮らす中国民衆の「等身大」の現実を感じとろうとする、そこに竹内文学の拠点があったのである。

この竹内のあり方は、水俣病闘争を自己の文学の対象とし続けた石牟礼道子の文学と多くの点で共通している。石牟礼もまた水俣に身を置いて不知火の海を限りなく愛しんでいながらも、その海を自身の生業の場とする漁民ではなかった。しかもみずからは漁民同様の常民の目線から水俣病闘争を見つめ、これを自己の文学の対象とする方法をとっていた。その際、石牟礼はむろん自身が漁民同様の常民ではあり得ないこと、「等身大」を越える世界に向けて文学の言葉を吐こうとする存在であることを自覚していた。にもかかわらず文学者石牟礼が竹内と異なって評論集ばかりでなく、「天湖」「十六夜橋」を始めとする珠玉の小説を書くことができたのは、生涯を通じてその生活の場として不知火海を離れず、常民である水俣漁民の傍らを離れなかったことにある。その意味で石牟礼は竹内に比べて常民的要素をより強く残し

ていたのである。石牟礼と竹内の共通点は自己内部の矛盾を自覚的に抱えるために、「言葉の不自由を知りつつ真切一片の言葉を吐く」というその文学の特有性にある。

あえてここで水俣病を素材としつつ、石牟礼と竹内を比較的に論じたのは、この二人が他の一般の水俣病支援者のように「政治」と「非政治」の間を空間的、意識的に行き来するのではなく、むしろ「非政治」をどこまでも引きずりつつ「政治」にかかわる姿勢を保ち続けたからである。またそのことによって自身が「非政治世界」の常民とはなり得ないことを知りつつ、自己の文学が対象とする常民と向き合おうことを文学の方法としたこと、そのことの意味を明らかにしたかったからである<sup>7</sup>。

この意味で石牟礼や竹内は、前述した松下圭一や小林直樹あるいはダニエル・ベルやライト・ミルズなどの「大衆社会論」者とは異なっている。松下や小林は民衆の「非政治」を否定的に見て、これを「啓蒙者」的な立場から「政治」へと導こうとする姿勢を持った。この意味で彼らには「自己のうちに常民」を愛しんで見る視点がなかった。これに対して石牟礼や竹内はむしろ民衆の「非政治」と同様のものを自らが抱えることを自覚して、その「非政治」に自らの意識を係留しつつ、しかも「非政治世界」を越える「政治世界」に向けて言葉を吐くことを自身の使命とした。こうした姿勢は常識的な「啓蒙者」とは根本的に異なるが、しかし民衆自体が水俣漁民のように「非政治性」を抱えたまま「政治性」を帯びた住民運動に立ち上がる際に、その往く道を指し示す役割を担うという意味では、真正の「啓蒙者」と呼んでもよい存在だったのである。

### [III]

#### 坂口安吾と劉再復：戦後と革命後

かつて坂口安吾は日本の敗戦直後の昭和21年に「墮落論」を書いて次のように述べた。

「戦争は終わった。特攻隊の勇士は闇屋になっている。戦争未亡人はすでに新しい面影によって胸をふくらましている。人間はかわりはしない。ただうしなわれていた人間へもどってきただけだ。……人間は生き、人間は墮ちる。それ以外に人間を救う便利な道はない」<sup>8</sup>。

こうした坂口の態度は戦時体制下においても一貫していた。たとえば昭和17年友人大井広介について書いた文章の中で述べている。

「大井広介の評論もデタラメだ。……（しかし）これは非常にいい所だと僕は思う。（大井の）文学というものが孤立せず、生活の全部が文学の中に現れてくる。いったい日本の文学者達は、文学のことだけ語り、文学以外のことなど語らぬのが純粋だと思っているらしいが、之は逆だと僕は思う。真に文学が生きているなら、生活の全部が文学にならねばならぬ」（括弧内は筆者注釈）<sup>9</sup>。

さらに昭和18年7月号の『現代文学』の巻頭随筆に言う。

「戦時体制の文学と云う人もあるが、……僕は戦時体制の文学というものを考えられぬ。……飛行機があれば戦争に勝つ、それならば……全てを犠牲に飛行機をつくれ。……そんなとき、僕は筆を執るよりもハンマーをふる方がいいと思う。その代わり、僕が筆を握っている限り、僕は悠々閑々たる余裕の文学を書きたい」<sup>10</sup>。

安吾が『墮落論』で「失われていた人間」と呼ぶもの、それは「等身大」の生活の「非政治世界」に生きる人間にほかならない。戦時日本の国家体制は、そのような人間から生活を奪い、国家への「忠誠」という道義的な「政治世界」へと組み込んで成立した。それゆえ坂口は戦時に強調された